

第11回山口西田読書会テキスト
村上春樹「カンガルー日和」

■「カンガルー日和」には三つの版がありますが、今回は初出「トレフル版」をテキストにしたいと思います。

○三つの版を、A、B、Cのテキストに示しました。

- A カンガルー日和(初出「トレフル」版1981.10)
- B カンガルー日和(『村上春樹全作品』版1991.1)
- C カンガルー日和(『はじめての文学』版2006.12)

○bはA→Bの異同、cはB→Cの異同を示したものです。

- b カンガルー日和(校訂版『村上春樹全作品』版1991.1)
- c カンガルー日和(校訂版『はじめての文学』版2006.12)

○ここでは、5つのバージョンを次のように配列しました。

- A カンガルー日和(初出「トレフル」版1981.10)
- b カンガルー日和(校訂版『村上春樹全作品』版1991.1)
- B カンガルー日和(『村上春樹全作品』版1991.1)
- c カンガルー日和(校訂版『はじめての文学』版2006.12)
- C カンガルー日和(『はじめての文学』版2006.12)

A カンガルー日和(初出「トレフル」1981.10)

柵の中には四匹のカンガルーがいた。一匹が雄で二匹が雌、あとの一匹が生まれたばかりの子供である。

カンガルーの柵の前には、僕と彼女しかいない。もともとたいして人気のある動物園でもないし、おまけに月曜の朝だ。入場客の数よりは動物の数のほうがずっと多い。

我々の目あてはむろんカンガルーの赤ん坊である。それ以外に見るべきものなんて何も思いつかない。

我々は一月前の新聞の地方版でカンガルーの赤ん坊の誕生を知った。そして一ヶ月間カンガルーの赤ん坊を見物するに相応しい朝の到来を待ち続けていたのである。しかし、そんな朝はなかなかやってこなかった。ある朝には雨が降っていた。次の朝にもやはり雨は降っていた。その次の朝には地面がぬかるんでいたし、それに続く二日間は嫌な風が吹いていた。ある朝には彼女の虫歯が痛み、ある朝には僕が区役所に出かけねばならなかった。

そんな風にして一ヶ月が過ぎた。

一カ月なんて、まったくのところで、あつという間に過ぎてしまう。この一カ月のあいだいったい何をしていたのか、僕にはまるで思い出せない。いろんなことをやったような気もするし、何もしなかったような気もする。月末になって新聞の集金人がやってくるまで、一ヶ月が過ぎてしまったことにさえ僕は気づかなかった。

しかし何はともあれ、カンガルーを見るための朝はやってきた。我々は朝の六時に目覚め、窓のカーテンを開け、それがカンガルー日和であることを一瞬のうちに確認した。我々は顔を洗い、食事を済ませ、猫に食事を与え、洗濯をし、日除け帽をかぶって家を出た。

「ねえ、まだカンガルーの赤ん坊は生きているかな？」と電車の中で彼女は僕に訊ねた。

「生きてると思うよ。だって死んだってという記事が出ないもの」

「病気をして、どこかに入院したかもしれないわよ」

「それにしても記事は出るさ」

「ノイローゼにかかって奥にひっこんでるんじゃないかしら」

「赤ん坊が？」

「まさか。母親がよ。奥の暗い部屋に赤ん坊を連れてとじこもってるんじゃないかしら」

女の子というのは実にいろんな可能性を思いつくものだ僕らは感心する。

「なんだか、この機会を逃すと二度とカンガルーの赤ちゃんを見られないような気がするのよ」

「そんなものかな」

「だってあなた、これまでにカンガルーの赤ちゃんを見たことある？」

「いや、ないな」

「これから先、見るだろうって自信ある？」

「どうだろう。わからないよ」

「だから私は心配してるのよ」

「でもね」と僕は抗議した。「たしかに君の言うとおりかもしれないけれど、僕はキリンのお産だって見たことないし、鯨が泳いでいるところだって見たことがない。なぜそれなのにカンガルーの赤ちゃんだけがいま問題になるのだろうか」

「カンガルーの赤ちゃんだからよ」と彼女は言った。

僕はあきらめて新聞を眺める。これまで女の子と議論して勝ったことなんて一度もない。

カンガルーの赤ん坊はもちろん生きていた。彼（あるいは彼女）は新聞の写真で見たよりずっと大きくなっていて、元気に地面を駆けまわっていた。それはもう赤ん坊というよりは小型のカンガルーだった。その事実が彼女を少しがっかりさせる。

「もう赤ん坊じゃないみたい」

赤ん坊みたいなもんだよ、と僕は彼女を慰める。

「もっと早く来るべきだったのよ」

僕が売店まで行ってチョコレート・アイスクリームをふたつ買って戻ってきた時、彼女はまだ柵にもたれてじっとカンガルーを眺めていた。

「もう赤ん坊じゃないのよ」と彼女は繰り返した。

「そう？」と言って僕はアイスクリームをひとつ彼女にわたす。

「だって赤ん坊ならお母さんの袋に入ってるはずよ」

僕は肯いてアイスクリームをなめる。

「でも入ってないもの」

我々はとりあえず母親カンガルーを探した。父親カンガルーの方はすぐにわかった。いちばん巨大で、いちばん物静かなのが父親カンガルーだ。彼は才能が枯れ尽きてしまった作曲家のような顔つきで餌箱の中の緑の葉をじっと眺めている。残りの二匹は雌だが、どちらも同じような体つきで、同じような体色で、同じような顔つきである。どちらが母親だとしてもおかしくはない。

「でも、どちらかが母親で、どちらかが母親じゃないんだ」と僕は言った。

「うん」

「とすると、母親じゃない方のカンガルーはいったいなんだ？」

わからない、と彼女は言った。

そんなことはおかまいなくカンガルーの赤ん坊は地面を走りまわり、ところどころに意味もなく前足で穴を掘りつづけていた。彼／彼女は退屈を知らぬ生

きものであるようだった。父親の周囲をぐるぐるとまわり、緑の草を少しだけ齧り、地面を掘り、二匹の雌カンガルーにちょっかいを出し、地面にごろりと横になり、そしてまた起き上がって走りはじめた。

「なぜカンガルーはあんなに速く跳んで走るのかしら？」と彼女が訊ねた。

「敵から逃げるためさ」

「敵？ どんな敵？」

「人間だよ」と僕は言った。「人間がブーメランでカンガルーを殺して肉を食べるんだ」

「なぜカンガルーの赤ん坊はお母さんのおなかの袋に入るの？」

「一緒に逃げるためさ。子供はそんなに速く走れないから」

「保護されているのね？」

「うん」と僕は言う。「子供はみんな保護されているんだ」

「どれくらいの期間保護されるの？」

僕は動物図鑑でカンガルーについての何もかもをきちんと調べてくるべきであったのだ。こうなることははじめからわかっていたのだから。

「一ヵ月か二ヵ月、そんなものだろうな」

「じゃあ、あの子はまだ一ヵ月だから」と彼女は赤ん坊カンガルーを指さす。

「お母さんの袋の中に入るわけね」

「うん」僕は言った「たぶんね」

「ねえ、あの袋の中に入るって素敵だと思わない？」

「そうだね」

「ドラえもののポケットって胎内回帰願望なのかしら？」

「どうかな」

「きっとそうよ」

日はすっかり高くなっていった。近くのプールからは子供たちの歓声が聞こえてくる。空にはくっきりとした夏の雲が浮かんでいた。

「何か食べる？」と僕は彼女に訊ねた。

「ホットドッグ」と彼女は言った。「それにコーラ」

ホットドッグ売りは若い学生アルバイトで、ワゴンの形をした屋台の中に大型のラジオ・カセットを持ちこんでいた。ホットドッグが焼きあがるまでステイビー・ワンダーとビリー・ジョエルが歌を唄ってくれた。

僕がカンガルーの柵に戻ると、彼女は「ほら」と言って一匹の雌カンガルーを指さした。

「ほら、見て、袋の中に入ったわよ」

たしかに赤ん坊カンガルーは母親の袋の中にもぐりこんでいた。おなかの袋は大きくふくらんで、小さな尖った耳と尻尾の先端だけがぴょこんと上にとび出していた。

「重くないのかしら？」

「カンガルーはカもちなんだ」

「本当？」

「だから今まで生き延びてきたんだ」

母親は強い日差しの中で汗ひとつつかいてはいなかった。青山通りのスーパー・マーケットで昼下りの買物を済ませ、コーヒー・ショップでちょっと一服しているといった感じだ。

「保護されているのね？」

「うん」

「寝ちゃったのかしら？」

「たぶんね」

我々はホットドッグを食べ、コーラを飲み、そしてカンガルーの柵をあとにした。

我々が立ち去る時にも父親カンガルーはまだ餌箱の中に失われた音符を捜し求めていた。母親カンガルーと赤ん坊カンガルーは一体となって時の流れに体を休め、ミステリアスな雌カンガルーは尻尾の具合を試すように柵の中で跳躍を繰り返していた。

久し振りに暑い一日になりそうだった。

「ねえ、ビールでも飲まない？」と彼女は言った。

「いいね」と僕は言った。

b カンガルー日和(校訂版『村上春樹全作品』版1991.1)

柵の中には四匹のカンガルーがいた。一匹が雄で二匹が雌、あとの一匹が生まれたばかりの子供である。

カンガルーの柵の前には、僕と彼女しかいない。もともとたいして人気のある動物園でもないし、おまけに月曜の朝だ。入場客の数よりは動物の数のほうがずっと多い。これは誇張ではない。本当にそうなのだ。

我々の目あてはもちろんカンガルーの赤ん坊である。それ以外に見るべき何があるだろう？

我々はひと月前の新聞の地方版でカンガルーの赤ん坊の誕生を知った。そして一ヶ月間カンガルーの赤ん坊を見物するに相応しい朝の到来を待ち続けたのである。しかし、そんな朝はなかなかやっちはこなかった。ある朝には雨が降っていた。次の朝にもやはり雨は降っていた。その次の朝には地面がぬかるんでいたし、それに続く二日間は嫌な風が吹いていた。ある朝には彼女の虫歯が痛み、ある朝には僕が区役所に出かけねばならなかった。僕はあまり大きなことは言いたくない。でもあえて言わせていただくなら、それが人生なのだ。

そんな風にして一ヶ月が過ぎた。

一ヵ月なんて、まったくのところ、あっという間に過ぎてしまう。この一ヵ月のあいだいったい何をしてきたのか、僕にはまるで思い出せない。いろんなことをやったような気もするし、何もしなかったような気もする。月末になって新聞の集金人がやってくるまで、一ヵ月が過ぎてしまったことにさえ僕は気づかなかった。そう、それが人生なのだ。

しかし何はともあれ、カンガルーを見るための朝はようやくやってきた。我々は朝の六時に目覚め、窓のカーテンを開け、それがカンガルー日和であることを一瞬のうちに認識し確認した。我々は急いで顔を洗い、食事を済ませ、猫に食事を与え、洗濯をし、日除け帽をかぶって家を出た。

「ねえ、まだカンガルーの赤ん坊は生きてるかな？」と電車の中で彼女は僕に訊ねた。

「生きてると思うよ。だって死んだっていう記事が出ないもの。死んだら死んだっていう記事が出るはずだよ」

「死なないまでも、病気をしてどこかに入院したかもしれないわよ」

「それにしても記事は出るさ」

「ノイローゼにかかって奥にひっこんでるんじゃないかしら」

「赤ん坊が？」

「まさか。母親がよ。何かですごいショックを受けて、奥の暗い部屋に赤ん坊を連れてとじこもってるんじゃないかしら」

女というのは実にいろんな可能性を思いつくものだと僕は感心する。ショックだって。カンガルーがどんなショックを受けるんだろう？

「私ね、なんだかこの機会を逃すと二度とカンガルーの赤ちゃんを見られないような気がするのよ」

「そんなものかな」

「だってあなた、これまでにカンガルーの赤ちゃんを見たことある？」

「いや、ないな」

「これから先、見るだろうって自信ある？」

「どうだろう。わからないね」

「だから私は心配してるのよ」

「でもね」と僕は抗議した。「たしかに君の言うとおりにかもしれないけれど、僕はキリンのお産だって見たことないし、鯨が泳いでいるところだって見たことがない。なぜそれなのにカンガルーの赤ちゃんだけがいま問題になるのだろうか」

「そんなことかかないで。それはカンガルーの赤ちゃんだからよ。それ以上の何物でもないのよ」と彼女は言った。

僕はあきらめて新聞を眺める。これまで女の子と議論して勝ったことなんて一度もないのだ。

カンガルーの赤ん坊はもちろん生きていた。彼（あるいは彼女）は新聞の写真で見たよりずっと大きくなっていて、元気に柵の中の地面を駆けまわっていた。それはもう赤ん坊というよりは小型のカンガルーだった。その事実が彼女を少しがっかりさせる。

「もう赤ん坊じゃないみたい」

赤ん坊みたいなもんだよ、と僕は彼女を慰める。

「私たち、もっと早く来るべきだったのよ」

僕は彼女の腰に手をまわして、軽くとんとんと叩く。彼女は首を振る。僕は何とか彼女を慰めたいと思う。カンガルーの赤ちゃんがすっかり成長してしまっただけについて。でもどのように慰めたところで、それはもうとにかく成長してしまっただけだ。だから僕は何も言わない。

僕が売店まで行ってチョコレート・アイスクリームをふたつ買って戻ってきた時、彼女はまだ柵にもたれてじっとカンガルーを眺めていた。

「もう赤ん坊じゃないのよ」と彼女は繰り返した。

「そう？」と言って僕はアイスクリームをひとつ彼女にわたす。

「だって赤ん坊ならお母さんの袋に入ってるはずよ」

僕は肯いてアイスクリームをなめる。

「でも入ってないもの」

我々はとりあえず母親カンガルーを探した。父親カンガルーの方はすぐにわかった。いちばん巨大で、いちばん物静かなのが父親カンガルーだ。彼は才能

が枯れ尽きてしまった作曲家のような顔つきで餌箱の中の緑の葉をじっと眺めている。残りの二匹は雌だが、どちらも同じような体つきで、同じような体色で、同じような顔つきである。どちらが**その赤ん坊カンガルーの母親**だとしてもおかしくはない。

「でも、どちらかが母親で、どちらかが母親じゃないんだ」と僕は言った。

「うん」

「とすると、母親じゃない方のカンガルーはいったいなんだ？」

わからない、と彼女は言った。

そんなことにはおかまいなくカンガルーの赤ん坊は地面を走りまわり、ところどころに意味もなく前足で穴を掘りつづけていた。彼／彼女は退屈を知らぬ生きものであるようだった。父親の周囲をぐるぐるとまわり、緑の草を少しだけ齧り、地面を掘り、二匹の雌カンガルーにちょっかいを出し、地面にごろりと横になり、そしてまた起き上がって走りはじめた。

「なぜカンガルーはあんなに速く跳んで走るのかしら？」と彼女が訊ねた。

「敵から逃げるためさ」

「敵？ どんな敵？」

「人間だよ」と僕は言った。「人間がブーメランでカンガルーを殺して肉を食べるんだ」

「なぜカンガルーの赤ん坊はお母さんのおなかの袋に入るの？」

「一緒に逃げるためさ。子供はそんなに速く走れないから」

「保護されているのね？」

「うん」と僕は言う。「子供はみんな保護されているんだ」

「どれくらいの期間保護されるの？」

僕は動物図鑑でカンガルーについての何もかもをきちんと調べてくるべきであったのだ。こうなることははじめからわかっていたのだから。

「一ヵ月か二ヵ月、そんなものだろうな」

「じゃあ、あの子はまだ一ヵ月だから」と彼女は赤ん坊カンガルーを指さす。

「お母さんの袋の中に入るわけね」

「うん」僕は言った「たぶんね」

「ねえ、あの袋の中に入るって素敵だと思わない？」

「そうだね」

~~「ドラえもののポケットって胎内回帰願望なのかしら？」~~

~~「どうかな」~~

~~「きっとそうよ」~~

日はすっかり高くなっていた。近くのプールからは子供たちの歓声が聞こえてくる。空にはくっきりとした夏の雲が浮かんでいた。

「何か食べる？」と僕は彼女に訊ねた。

「ホットドッグ」と彼女は言った。「それにコーラ」

ホットドッグ売りは若い学生アルバイトで、ワゴンの形をした屋台の中に大型のラジオ・カセットを持ちこんでいた。ホットドッグが焼きあがるまでステイビー・ワンダーとビリー・ジョエルが歌を唄ってくれた。

僕がカンガルーの柵に戻ると、彼女は「ほら」と言って一匹の雌カンガルーを指さした。

「ほら、見て、袋の中に入ったわよ」

たしかに赤ん坊カンガルーは母親（**たぶんそれが母親なのだろう**）の袋の中にもぐりこんでいた。おなかの袋は大きくふくらんで、小さな尖った耳と尻尾の先端だけがぴょこんと上にとび出していた。**それは素敵な眺めだった。わざわざ見物に来たかがあるというものだ。**

「あんなのが入って重くないのかしら？」

「だいじょうぶだよ。カンガルーは力持ちだからね」

「本当？」

「だから今まで生き延びてきたんだ」

母親は強い日差しの中で汗ひとつかいてはいなかった。青山通りのスーパー・マーケットで昼下がりの買物を済ませ、コーヒー・ショップでちょっと一服しているといった感じだ。

「保護されているのね？」

「うん」

「赤ん坊、寝ちゃったのかしら？」

「たぶんね」

我々はホットドッグを食べ、コーラを飲み、そしてカンガルーの柵をあとにした。

我々が立ち去る時にも父親カンガルーはまだ餌箱の中に失われた音符を捜し求めていた。母親カンガルーと赤ん坊カンガルーは一体となって時の流れに体を休め、ミステリアスな雌カンガルーは尻尾の具合を試すように柵の中で跳躍を繰り返していた。

久し振りに暑い一日になりそうだった。

「ねえ、ビールでも飲まない？」と彼女は言った。

「いいね」と僕は言った。

B カンガルー日和(『村上春樹全作品』版1991.1)

柵の中には四匹のカンガルーがいた。一匹が雄で二匹が雌、あとの一匹が生まれたばかりの子供である。

カンガルーの柵の前には、僕と彼女しかいない。もともとたいして人気のある動物園でもないし、おまけに月曜の朝だ。入場客の数よりは動物の数のほうがずっと多い。これは誇張ではない。本当にそうなのだ。

我々の目あてはもちろんカンガルーの赤ん坊である。それ以外に見るべき何があるだろう？

我々はひと月前の新聞の地方版でカンガルーの赤ん坊の誕生を知った。そして一ヶ月間カンガルーの赤ん坊を見物するに相応しい朝の到来を待ち続けたのである。しかし、そんな朝はなかなかやってはこなかった。ある朝には雨が降っていた。次の朝にもやはり雨は降っていた。その次の朝には地面がぬかるんでいたし、それに続く二日間は嫌な風が吹いていた。ある朝には彼女の虫歯が痛み、ある朝には僕が区役所に出かけねばならなかった。僕はあまり大きなことは言いたくない。でもあえて言わせていただくなら、それが人生なのだ。

そんな風にして一ヶ月が過ぎた。

一カ月なんて、まったくのところで、あつという間に過ぎてしまう。この一カ月のあいだいったい何をしていたのか、僕にはまるで思い出せない。いろんなことをやったような気もするし、何もしなかったような気もする。月末になって新聞の集金人がやってくるまで、一カ月が過ぎてしまったことにさえ僕は気づかなかった。そう、それが人生なのだ。

しかし何はともあれ、カンガルーを見るための朝はようやくやってきた。我々は朝の六時に目覚め、窓のカーテンを開け、それがカンガルー日和であることを一瞬のうちに認識し確認した。我々は急いで顔を洗い、食事を済ませ、猫に食事を与え、洗濯をし、日除け帽をかぶって家を出た。

「ねえ、まだカンガルーの赤ん坊は生きてるかな？」と電車の中で彼女は僕に訊ねた。

「生きてると思うよ。だって死んだっていう記事が出ないもの。死んだら死んだっていう記事が出るはずだよ」

「死なないまでも、病気をしてどこかに入院したかもしれないわよ」

「それにしても記事は出るさ」

「ノイローゼにかかって奥にひっこんでるんじゃないかしら」

「赤ん坊が？」

「まさか。母親がよ。何かですごいショックを受けて、奥の暗い部屋に赤ん坊を連れてとじこもってるんじゃないかしら」

女というのは実にいろんな可能性を思いつくものだと僕は感心する。ショックだって。カンガルーがどんなショックを受けるんだろう？

「私ね、なんだかこの機会を逃すと二度とカンガルーの赤ちゃんを見られないような気がするのよ」

「そんなものかな」

「だってあなた、これまでにカンガルーの赤ちゃんを見たことある？」

「いや、ないな」

「これから先、見るだろうって自信ある？」

「どうだろう。わからないね」

「だから私は心配してるのよ」

「でもね」と僕は抗議した。「たしかに君の言うとおりにかもしれないけれど、僕はキリンのお産だって見たことないし、鯨が泳いでいるところだって見たことがない。なぜそれなのにカンガルーの赤ん坊だけがいま問題になるのだろうか」

「そんなことかかないで。それはカンガルーの赤ん坊だからよ。それ以上の何物でもないのよ」と彼女は言った。

僕はあきらめて新聞を眺める。これまで女の子と議論して勝ったことなんて一度もないのだ。

カンガルーの赤ん坊はもちろん生きていた。彼（あるいは彼女）は新聞の写真で見たよりずっと大きくなっていて、元気に柵の中の地面を駆けまわっていた。それはもう赤ん坊というよりは小型のカンガルーだった。その事実が彼女を少しがっかりさせる。

「もう赤ん坊じゃないみたい」

赤ん坊みたいなもんだよ、と僕は彼女を慰める。

「私たち、もっと早く来るべきだったのよ」

僕は彼女の腰に手をまわして、軽くとんとんと叩く。彼女は首を振る。僕は何とか彼女を慰めたいと思う。カンガルーの赤ちゃんがすっかり成長してしまっただけについて。でもどのように慰めたところで、それはもうとにかく成長してしまっただけだ。だから僕は何も言わない。

僕が売店まで行ってチョコレート・アイスクリームをふたつ買って戻ってきた時、彼女はまだ柵にもたれてじっとカンガルーを眺めていた。

「もう赤ん坊じゃないのよ」と彼女は繰り返した。

「そう？」と言ってぼくはアイスクリームをひとつ彼女にわたす。

「だって赤ん坊ならお母さんの袋に入ってるはずよ」

僕は肯いてアイスクリームをなめる。

「でも入ってないもの」

我々はとりあえず母親カンガルーを探した。父親カンガルーの方はすぐにわかった。いちばん巨大で、いちばん物静かなのが父親カンガルーだ。彼は才能

が枯れ尽きてしまった作曲家のような顔つきで餌箱の中の緑の葉をじっと眺めている。残りの二匹は雌だが、どちらも同じような体つきで、同じような体色で、同じような顔つきである。どちらがその赤ん坊カンガルーの母親だとしてもおかしくはない。

「でも、どちらかが母親で、どちらかが母親じゃないんだ」と僕は言った。

「うん」

「とすると、母親じゃない方のカンガルーはいったいなんだ？」

わからない、と彼女は言った。

そんなことにはおかまもなくカンガルーの赤ん坊は地面を走りまわり、ところどころに意味もなく前足で穴を掘りつづけていた。彼／彼女は退屈を知らぬ生きものであるようだった。父親の周囲をぐるぐるとまわり、緑の草を少しだけ齧り、地面を掘り、二匹の雌カンガルーにちょっかいを出し、地面にごろりと横になり、そしてまた起き上がって走りはじめた。

「なぜカンガルーはあんなに速く跳んで走るのかしら？」と彼女が訊ねた。

「敵から逃げるためさ」

「敵？　どんな敵？」

「人間だよ」と僕は言った。「人間がブーメランでカンガルーを殺して肉を食べるんだ」

「なぜカンガルーの赤ん坊はお母さんのおなかの袋に入るの？」

「一緒に逃げるためさ。子供はそんなに速く走れないから」

「保護されているのね？」

「うん」と僕は言う。「子供はみんな保護されているんだ」

「どれくらいの期間保護されるの？」

僕は動物図鑑でカンガルーについての何もかもをきちんと調べてくるべきであったのだ。こうなることははじめからわかっていたのだから。

「一ヵ月か二ヵ月、そんなものだろうな」

「じゃあ、あの子はまだ一ヵ月だから」と彼女は赤ん坊カンガルーを指さす。

「お母さんの袋の中に入るわけね」

「うん」僕は言った「たぶんね」

「ねえ、あの袋の中に入るって素敵だと思わない？」

「そうだね」

日はすっかり高くなっていった。近くのプールからは子供たちの歓声が聞こえてくる。空にはくっきりとした夏の雲が浮かんでいた。

「何か食べる？」と僕は彼女に訊ねた。

「ホットドッグ」と彼女は言った。「それにコーラ」

ホットドッグ売りは若い学生アルバイトで、ワゴンの形をした屋台の中に大型のラジオ・カセットを持ちこんでいた。ホットドッグが焼きあがるまでスティビー・ワンダーとビリー・ジョエルが歌を唄ってくれた。

僕がカンガルーの柵に戻ると、彼女は「ほら」と言って一匹の雌カンガルーを指さした。

「ほら、見て、袋の中に入ったわよ」

たしかに赤ん坊カンガルーは母親（たぶんそれが母親なのだろう）の袋の中にもぐりこんでいた。おなかの袋は大きくふくらんで、小さな尖った耳と尻尾の先端だけがぴょこんと上にとび出していた。それは素敵な眺めだった。わざわざ見物に来たかがあるというものだ。

「あんなのが入って重くないのかしら？」

「だいじょうぶだよ。カンガルーは力持ちだからね」

「本当？」

「だから今まで生き延びてきたんだ」

母親は強い日差しの中で汗ひとつかいてはいなかった。青山通りのスーパー・マーケットで昼下りの買物を済ませ、コーヒー・ショップでちょっと一服しているといった感じだ。

「保護されているのね？」

「うん」

「赤ん坊、寝ちゃったのかしら？」

「たぶんね」

我々はホットドッグを食べ、コーラを飲み、そしてカンガルーの柵をあとにした。

我々が立ち去る時にも父親カンガルーはまだ餌箱の中に失われた音符を捜し求めていた。母親カンガルーと赤ん坊カンガルーは一体となって時の流れに体を休め、ミステリアスな雌カンガルーは尻尾の具合を試すように柵の中で跳躍を繰り返していた。

久し振りに暑い一日になりそうだった。

「ねえ、ビールでも飲まない？」と彼女は言った。

「いいね」と僕は言った。

C カンガルー日和(校訂版『はじめての文学』版2006.12)

柵の中には**全部**で四匹のカンガルーがいた。一匹が雄で二匹が雌、あとの一匹が生まれたばかりの子供だ。

カンガルーの柵の前には、僕と彼女しかいない。もともと**それほど**人気がある動物園でもないし、おまけに**今日は**月曜の朝だ。入場客の数よりは動物の数のほうが**はるかに**多い。**大げさに**言っているわけではない。**実際**にそうなのだ。

我々の目あてはもちろんカンガルーの赤ん坊である。それ以外に見るべき何があるだろう？

我々はひと月前の新聞の地方版でカンガルーの赤ん坊の誕生を知った。そして一カ月前カンガルーの赤ん坊を見物するの**にふさわしい朝がやってくるのをじっとしんぼう強く待ちつづけていたのである**。せつかく**カンガルーの赤ん坊を見に行くのだから、我々としてはできるだけ正しいかたちでカンガルーの赤ん坊を見たかった**。そしてできることなら、**ささやかな祝福を与えてやりたかった**。しかし、そんな朝はなかなかやってはこなかった。ある朝には雨が降っていた。次の朝にもやはり雨は降っていた。その次の朝には地面がぬかるんでいたし、それに続く二日間は**いやな風**が吹いていた。ある朝には彼女の虫歯が痛み、ある朝には僕が**何かの書類を持って区役所に行かなくてはならなかった**。**なかなかうまくいかない**。僕はあまり大きなことは言いたくないけれど、でもあえて言わせてもらえば、**そういうのが人生なのだ**。

そんな風にして一ヶ月が過ぎた。

一カ月前なんて、まったくのところ、あつという間に過ぎてしまう。この一カ月のあいだいったい何をしていたのか、僕にはまるで思い出せない。いろんなことをやったような気もするし、何もしなかったような気もする。**でもいづれにせよ**月末になって新聞の集金人がやってくるまで、一カ月前が過ぎってしまったことにさえ僕は気づかなかった。**そう、それが人生なのだ。**

しかし**何はともあれ**、カンガルーを見るための朝はようやく**めぐって**きた。我々は朝の六時に目覚め、窓のカーテンを開け、それがカンガルー日和であることを一瞬のうちに認識し確認した。我々は急いで顔を洗い、食事を済ませ、猫に食事を与え、洗濯をし、日除け帽をかぶって家を出た。**会社は休むことにした**。なにしろそれは**一カ月ぶりのカンガルー日和なのだから**。

「ねえ、まだカンガルーの赤ん坊は**ちゃんと**生きているかな？」と電車の中で彼女は僕に訊ねた。

「生きてると思うよ。だって死んだって**いう記事が新聞に出ないもの**。死んだら死んだって**いう記事が出るはずだよ**」

「死なないまでも、病気を**してどこかに入院したかもしれないわよ**」

「それにしても記事は出るさ」

「ノイローゼにかかって奥にひっこんでるんじゃないかしら」

「赤ん坊が？」

「まさか。母親がよ。何かで**すごい精神的**ショックを受けて、奥の暗い部屋に赤ん坊を連れて**ひっそりと閉じこも**ってるんじゃないかしら」

女性というのは実にいろんな可能性を思いつくものだと僕は感心**してしまう**。**精神的**ショックだって。カンガルーがどんな**精神的**ショックを受けるんだろう？

「私ね、なんだかこの機会を逃すと二度と**永遠に**カンガルーの赤ちゃんを見られないような気がするのよ、**宿命みたいに**」

「そんなものかな」

「だってあなた、これまでにカンガルーの赤ちゃんを見たことある？」

「いや、ないな」

「これから先、見るだろうって自信ある？」

「どうだろう。わからないね」

「だから私は**真剣に**心配してるのよ」

「でもね」と僕は抗議した。「たしかに君の言うとおりにかもしれないけれど、僕はキリンのお産だって見たことないし、鯨が泳いでいるところだって見たことがない。なぜそれなのにカンガルーの赤ん坊だけがいま問題になるのだろう」

「そんなこときかないで。**今のところ**それはカンガルーの赤ん坊だからよ。**大事なのは今のところということなの**」と彼女は言った。

僕はあきらめて新聞を眺める。**そんなものなのかな**。

カンガルーの赤ん坊はもちろん生きていた。彼(あるいは彼女)は新聞の写真で見たよりずっと大きくなっていて、元気に柵の中の地面を駆けまわっていた。それはもう赤ん坊というよりは小型の**縮小版**のカンガルーだった。その事実が彼女を少しがっかりさせる。

「もう赤ん坊じゃないみたい」

まだ赤ん坊みたいなもんだよ、と僕は彼女を慰める。

「私たち、もっと早く来るべきだったのよ」

僕は彼女の腰に手をまわして、軽くとんとんと叩く。彼女は首を振る。僕は何とか彼女を慰めたいと思う。カンガルーの**赤ん坊が思ったより**成長してしまったことについて。でもどのように慰めたところで、それはもうとにかく成長してしまっただけだ。だから僕は何も言わない。**いくら親切心があっても、大きくなってしまったものはもう元には戻せない。流れてしまった時間も元には戻せない。それは僕の手にはあまることだ**。

僕が売店まで行ってチョコレート・アイスクリームをふたつ買って戻ってきた時、彼女は**まだ柵にもたれて**じっとカンガルーを眺めていた。

「もう赤ん坊じゃないのよ」と彼女は繰り返した。歴史学者が歴史観を繰り返すみたいに。

「そう？」と言ってぼくはアイスクリームをひとつ彼女にわたす。

「だって赤ん坊ならお母さんの袋に入ってるはずよ」

僕は肯いてアイスクリームをなめる。たしかにそのとおりだ。カンガルーの赤ん坊は母親のおなかの袋に入るものだ。えんどう豆がさやに入るみたいに。

「でも入ってないもの」

我々はとりあえず母親カンガルーを探した。父親カンガルーの方はすぐにはわかった。いちばん巨大で、いちばん物静かなのが父親カンガルーだ。彼は才能が枯れ尽きてしまった作曲家のような顔つきで餌箱の中の緑の葉をじっと眺めている。残りの二匹は雌だが、どちらも同じような体つきで、同じような体色で、同じような顔つきである。どちらがその赤ん坊カンガルーの母親だとしてもおかしくはない。

「でも、どちらかが母親で、どちらかが母親じゃないんだ」と僕は言った。

「うん」

「とすると、母親じゃない方のカンガルーはいったいどういう関係でここにいるんだろう？」

わからない、と彼女は言った。気のいい叔母さんかもしれないわね、と彼女はつけ加える。気のいい叔母さんか、と僕は思う。

そんなことにはおかまもなくカンガルーの赤ん坊は地面を走りまわり、ところどころに意味もなく前足で穴を掘りつづけていた。彼／彼女は退屈を知らぬ生きものであるようだった。父親の周囲をぐるぐるとまわり、緑の草を少しだけ齧り、地面を掘り、二匹の雌カンガルーにちょっかいを出し、地面にごろりと横になり、そしてまた起き上がって走りはじめた。

「なぜカンガルーはあんなに速く跳んで走るのかしら？」と彼女が訊ねた。

「敵から逃げるためさ」

「敵？ どんない敵？」

「たとえば人間だよ」と僕は言った。「人間がブーメランでカンガルーを殺して肉を食べるんだ。オーストラリアにはほかにカンガルーの天敵はいなかったと思うな。あまり自信はないけど、たぶん」

「なぜカンガルーの赤ん坊はお母さんのおなかの袋に入るの？」

「一緒に逃げるためさ。子供はそんなに速く走れないから」

「保護されているのね？」

「うん」と僕は言う。「子供はみんな保護されているんだ。自然はとても厳しいからね」

「どれくらいの期間保護されるの？」

僕は動物園に来る前に百科事典か動物図鑑でカンガルーについてのすべてをしっかり調べてくるべきだったのだ。こうなることははじめからわかっていた

のだから。

「一ヵ月か二ヵ月、そんなものだろうな」と僕は答える。これについてもあまり自信はないけれど。

「じゃあ、あの子はまだ一ヵ月だから」と彼女は赤ん坊カンガルーを指さす。

「お母さんの袋の中に入るわけね」

「うん」僕は言った「たぶんね」

「ねえ、あの袋の中に入ると素敵だと思わない？」

「そうだね」、でも本当はそんなに素敵ではないかもしれない。ただごわごわして、生ぐさいだけかもしれない。でも僕はそんなことは口にしない。なるべく良いことだけを口にしようと思う。明るい側面だけを見ようと思う。だって今日はカンガルー日和なんだから。

日はすっかり高くなっていった。近くのプールからは子供たちの歓声が聞こえてくる。空にはくっきりとした夏の雲が浮かんでいた。

「何か食べる？」と僕は彼女に訊ねた。

「ホットドッグ」と彼女は言った。「それにコーラ」

ホットドッグ売りは若い学生アルバイトで、ワゴンの形をした屋台の中に大型のラジオ・カセットを持ちこんでいた。ホットドッグが焼きあがるまでステイビー・ワンダーとビリー・ジョエルが歌を唄ってくれた。

僕がカンガルーの柵に戻ると、彼女は満面の笑みを浮かべながら「ほら」と言って一匹の雌カンガルーを指さした。

「ほら、見て、袋の中に入ったわよ」

たしかに赤ん坊カンガルーは母親（たぶんそれが母親なのだろう）の袋の中にもぐりこんでいた。おなかの袋は大きくふくらんで、小さなとがった耳としっぽの先端だけがびよこんと上にとび出していた。それは素敵な眺めだった。わざわざ見物に来たかがあるというものだ。

「あんなのが入って重くないのかしら？ うまく走って逃げられるかしら？ 悪いものに追いつかれないかしら？」

「だいじょうぶだよ。カンガルーは見かけより力持ちだからね」

「本当？」

「もちろん。だから今まで何万年もオーストラリア大陸で生き延びてくることができたんだ」僕は十五秒ばかりのあいだ、何万年という歳月について静かに考えてみる。

母親は強い日差しの中で汗ひとつかいてはいなかった。何か考え事でもしているみたいにそこでただじっと目を閉じていた。青田通りのスーパー・マーケットで屋下がりの買物を済ませ、近くのコーヒー・ショップでちょっと一服しているとあった感じだ。

「しっかりと保護されているのね？」

「うん袋の中に入っちゃえば、もう何も心配することはない」

「赤ん坊、寝ちゃったのかしら？」

「たぶんね。袋の中ではほかにやることもないから」

我々はホットドッグを食べ、コーラを飲み終え、そしてカンガルーの柵をあとにした。

我々が立ち去る時にも父親カンガルーはまだ餌箱の中に失われた音符をさがし求めていた。母親カンガルーと赤ん坊カンガルーは一体となって時の流れに体を休め、立場のよくわからない、あるいはただの気のいい叔母さんかもしれない雌カンガルーはしっぽの具合を試すように柵の中で軽いジャンプをくりかえしていた。

久し振りに暑い一日になりそうだった。

「ねえ、マレー熊を見にいかない？」と彼女は言った。

「いいね」と僕は言った。

C カンガルー日和(『はじめての文学』版2006.12)

柵の中には全部で四匹のカンガルーがいた。一匹が雄で二匹が雌、あとの一匹が生まれたばかりの子供だ。

カンガルーの柵の前には、僕と彼女しかいない。もともとそれほど人気がある動物園でもないし、おまけに今日は月曜の朝だ。入場客の数よりは動物の数のほうがはるかに多い。大げさに言っているわけではない。実際にそうなのだ。

我々の目あてはもちろんカンガルーの赤ん坊である。それ以外に見るべき何があるだろう？

我々はひと月前の新聞の地方版でカンガルーの赤ん坊の誕生を知った。そして一カ月間カンガルーの赤ん坊を見物するのにふさわしい朝がやってくるのをじっとしんぼう強く待ちつづけていた。せっかくカンガルーの赤ん坊を見に行くのだから、我々としてはできるだけ正しいかたちでカンガルーの赤ん坊を見たかった。そしてできることなら、ささやかな祝福を与えてやりたかった。しかし、そんな朝はなかなかやってはこなかった。ある朝には雨が降っていた。次の朝にもやはり雨は降っていた。その次の朝には地面がぬかるんでいたし、それに続く二日間はいやな風が吹いていた。ある朝には彼女の虫歯が痛み、ある朝には僕が何かの書類を持って役所に行かなくてはならなかった。なかなかうまくいかない。あまり大きなことは言いたくないけれど、でもあえて言わせてもらえば、そういうのが人生なのだ。

そんな風にして一ヶ月が過ぎた。

一カ月なんて、まったくのところ、あっという間に過ぎてしまう。この一カ月のあいだいったい何をしていたのか、僕にはまるで思い出せない。いろんなことをやったような気もするし、何もしなかったような気もする。でもいずれにせよ月末になって新聞の集金人がやってくるまで、一ヶ月が過ぎてしまったことにさえ僕は気づかなかった。

しかし、カンガルーを見るための朝はようやくめぐってきた。我々は朝の六時に目覚め、窓のカーテンを開け、それがカンガルー日和であることを一瞬のうちに認識し確認した。我々は急いで顔を洗い、食事を済ませ、猫に食事を与え、洗濯をし、日除け帽をかぶって家を出た。会社は休むことにした。なにしろそれは一カ月ぶりのカンガルー日和なのだから。

「ねえ、まだカンガルーの赤ん坊はちゃんと生きているかな？」と電車の中で彼女は僕に訊ねた。

「生きてると思うよ。だって死んだってという記事が新聞に出ないもの。死んだら死んだってという記事が出るはずだよ」

「死なないまでも、病気をしてどこかに入院したかもしれないわよ」

「それにしても記事は出るさ」

「ノイローゼにかかって奥にひっこんでるんじゃないかしら」

「赤ん坊が？」

「まさか。母親がよ。何かですごい精神的ショックを受けて、奥の暗い部屋に赤ん坊を連れてひっそりと閉じこもってるんじゃないかしら」

女性は実にいろんな可能性を思いつくものだとは僕は感心してしまう。精神的ショックだって。カンガルーがどんな精神的ショックを受けるんだろう？

「私ね、なんだかこの機会を逃すと二度と永遠にカンガルーの赤ちゃんを見られないような気がするのよ、宿命みたいに」

「そんなものかな」

「だってあなた、これまでにカンガルーの赤ちゃんを見たことある？」

「いや、ないな」

「これから先、見るだろうって自信ある？」

「どうだろう。わからないね」

「だから私は真剣に心配してるのよ」

「でもね」と僕は抗議した。「たしかに君の言うとおりにかもしれないけれど、僕はキリンのお産だって見たことないし、鯨が泳いでいるところだって見たことがない。なぜそれなのにカンガルーの赤ん坊だけがいま問題になるのだろう」

「そんなことかかないで。今のところそれはカンガルーの赤ん坊だからよ。大事なのは今のところということなの」と彼女は言った。

僕はあきらめて新聞を眺める。そんなものなのかな。

カンガルーの赤ん坊はもちろん生きていた。彼（あるいは彼女）は新聞の写真で見たよりずっと大きくなっていて、元気に柵の中の地面を駆けまわっていた。それはもう赤ん坊というよりは小型の縮小版のカンガルーだった。その事実が彼女を少しがっかりさせる。

「もう赤ん坊じゃないみたい」

まだ赤ん坊みたいなもんだよ、と僕は彼女を慰める。

「私たち、もっと早く来るべきだったのよ」

僕は彼女の腰に手をまわして、軽くとんとんと叩く。彼女は首を振る。僕は何とか彼女を慰めたいと思う。カンガルーの赤ん坊が思ったより成長してしまっただけについて。でもどのように慰めたところで、それはもうとにかく成長してしまっただけだ。だから僕は何も言わない。いくら親切心があっても、大きくなってしまったものはもう元には戻せない。流れてしまった時間も元には戻せない。それは僕の手にはあまることだ。

僕が売店まで行ってチョコレート・アイスクリームをふたつ買って戻ってきた時、彼女はまだ柵にもたれてじっとカンガルーを眺めていた。

「もう赤ん坊じゃないのよ」と彼女は繰り返した。歴史学者が歴史観を繰り返

すみたいに。

「そう？」と言ってぼくはアイスクリームをひとつ彼女にわたす。

「だって赤ん坊ならお母さんの袋に入ってるはずよ」

僕は肯いてアイスクリームをなめる。たしかにそのとおりだ。カンガルーの赤ん坊は母親のおなかの袋に入るものだ。えんどう豆がさやに入るみたいに。

我々はとりあえず母親カンガルーを探した。父親カンガルーの方はすぐにはわかった。いちばん巨大で、いちばん物静かなのが父親カンガルーだ。彼は才能が枯れ尽きてしまった作曲家のような顔つきで餌箱の中の緑の葉をじっと眺めている。残りの二匹は雌だが、どちらも同じような体つきで、同じような体色で、同じような顔つきである。どちらがその赤ん坊カンガルーの母親だとしてもおかしくはない。

「でも、どちらかが母親で、どちらかが母親じゃないんだ」と僕は言った。

「うん」

「とすると、母親じゃない方のカンガルーはいったいどういう関係でここにいるんだろう？」

わからない、と彼女は言った。気のいい叔母さんかもしれないわね、と彼女はつけ加える。気のいい叔母さんか、と僕は思う。

そんなことにはおかまいなくカンガルーの赤ん坊は地面を走りまわり、ところどころに意味もなく前足で穴を掘りつづけていた。彼／彼女は退屈を知らぬ生きものであるようだった。父親の周囲をぐるぐるとまわり、緑の草を少しだけ齧り、地面を掘り、二匹の雌カンガルーにちょっかいを出し、地面にごろりと横になり、そしてまた起き上がって走りはじめた。

「なぜカンガルーはあんなに速く跳んで走るのかしら？」と彼女が訊ねた。

「敵から逃げるためさ」

「敵？ どんない敵？」

「たとえば人間だよ」と僕は言った。「人間がブーメランでカンガルーを殺して肉を食べるんだ。オーストラリアにはほかにカンガルーの天敵はいなかったと思うな。あまり自信はないけど、たぶん」

「なぜカンガルーの赤ん坊はお母さんのおなかの袋に入るの？」

「一緒に逃げるためさ。子供はそんなに速く走れないから」

「保護されているのね？」

「うん」と僕は言う。「子供はみんな保護されているんだ。自然はとても厳しいからね」

「どれくらいの期間保護されるの？」

僕は動物園に来る前に百科事典か動物図鑑でカンガルーについてのすべてをしっかり調べてくるべきだったのだ。こうなることははじめからわかっていたのだから。

「一ヵ月か二ヵ月、そんなものだろうな」と僕は答える。これについてもあま

り自信はないけれど。

「じゃあ、あの子はまだ一ヵ月だから」と彼女は赤ん坊カンガルーを指さす。

「お母さんの袋の中に入るわけね」

「うん」僕は言った「たぶんね」

「ねえ、あの袋の中に入ると素敵だと思わない？」

「そうだね」、でも本当はそんなに素敵ではないかもしれない。ただごわごわして、生ぐさいだけかもしれない。でも僕はそんなことは口にしない。なるべく良いことだけを口にしようと思う。明るい側面だけを見ようと思う。だって今日はカンガルー日和なんだから。

日はすっかり高くなっていった。近くのプールからは子供たちの歓声が聞こえてくる。空にはくっきりとした夏の雲が浮かんでいた。

「何か食べる？」と僕は彼女に訊ねた。

「ホットドッグ」と彼女は言った。「それにコーラ」

ホットドッグ売りは若い学生アルバイトで、ワゴンの形をした屋台の中に大型のラジオ・カセットを持ちこんでいた。ホットドッグが焼きあがるまでステイビー・ワンダーとビリー・ジョエルが歌を唄ってくれた。

僕がカンガルーの柵に戻ると、彼女は満面の笑みを浮かべながら「ほら」と言って一匹の雌カンガルーを指さした。

「ほら、見て、袋の中に入ったわよ」

たしかに赤ん坊カンガルーは母親（たぶんそれが母親なのだろう）の袋の中にもぐりこんでいた。おなかの袋は大きくふくらんで、小さなのがった耳としっぽの先端だけがぴょこんと上にとび出していた。それは素敵な眺めだった。わざわざ見物に来たかがあるというものだ。

「あんなのが入って重くないのかしら？ うまく走って逃げられるかしら？

悪いものに追いつかれないかしら？」

「だいじょうぶだよ。カンガルーは見かけより力持ちだからね」

「本当？」

「もちろん。だから今まで何万年もオーストラリア大陸で生き延びてくることができたんだ」僕は十五秒ばかりのあいだ、何万年という歳月について静かに考えてみる。

母親は強い日差しの中で汗ひとつつかいてはいなかった。何か考え事でもしているみたいにそこでただじっと目を閉じていた。スーパー・マーケットで昼下がりの買物を済ませ、近くのコーヒー・ショップでちょっと一服しているとあった感じだ。

「しっかりと保護されているのね？」

「袋の中に入っちゃえば、もう何も心配することはない」

「赤ん坊、寝ちゃったのかしら？」

「たぶんね。袋の中ではほかにやることもないから」

我々はホットドッグを食べ、コーラを飲み終え、そしてカンガルーの柵をあとにした。

我々が立ち去る時にも父親カンガルーはまだ餌箱の中に失われた音符をさがし求めていた。母親カンガルーと赤ん坊カンガルーは一体となって時の流れに体を休め、立場のよくわからない、あるいはただの気のいい叔母さんかもしれない雌カンガルーはしっぽの具合を試すように柵の中で軽いジャンプをくりかえしていた。

久し振りに暑い一日になりそうだった。

「ねえ、マレー熊を見にいかない？」と彼女は言った。

「いいね」と僕は言った。

